

# 発掘調査あれこれ

About the Archaeology in Matsumae Town

久保 泰\*

Yasushi KUBO\*

キーワード：近代、北海道松前郡松前町、発掘調査

## はじめに

このたび『松前町郷土資料館研究紀要』が刊行されるにあたり、何か一文をということであったので記憶を辿りながら、今後の参考にでもなればと思いつつ記した次第である。

縁があって松前町教育委員会に赴任したのが昭和49(1974)年だから、もう半世紀前ということになる。当時の松前町は人口19,000人余、漁業の生産高も多く随分活気にあふれた町だった。また、NHKの朝ドラの舞台になったこともあって、全国的な知名度も上がった頃だった。

この年、町教委では機構改革を行い、これまでの次長制を改めて二課制にすることとし、社会教育課には課長と課長補佐を町外から招聘するという思い切った人事だった。私の役割は、この頃、町に郷土資料館を設置する計画があり、それを担当することと、折から始まってきた緊急発掘調査に対応する専任の職員にということであった。発掘調査には多少の経験はあったものの、資料館というものは全く未知の世界で、振り返ってみると思い切った無謀な決断だったような気がする。

それまで持っていた私の緊急発掘調査に対するイメージは、調査対象地にせいぜいトレッチを何本か入れて、短期間で終了というものだった。だが、48年の高野遺跡の調査は、私にとって驚きの連続だった。大規模な全面発掘方式は、道内では函館市桔梗遺跡の調

査が始まりのようで、次いで47年と翌年春の松前町の大津遺跡であり高野遺跡であった。

当時、道内では大規模な発掘調査に対応できる体制は整っておらず、例えば大津遺跡の場合では旭川市博物館の斎藤傑氏に調査担当を依頼し、調査員・補助員には同館の職員や他館の学芸員、教員、学生の応援を仰ぎながら6,600m<sup>2</sup>余の調査を終えたのである。高野遺跡では札幌医大講師峯山巖氏のもと、全道各地の小・中・高校の教員が調査員として参加した。峯山先生は元高校教員であり高文連(高等学校文化連盟)活動の郷土史研究の指導者として活動され、数々の発掘調査に携わってきた関係から、教員だけによる調査団が組まれたのである。

面積4,500m<sup>2</sup>余、期間40日余りで夏休みを主とした調査であった。こうした長丁場は、私にとって初めての経験であり、参考になることばかりであった。特に、峯山先生の人生経験豊かなお話や、先輩先生方との語らいは大いに勉強になった。また、明るく純朴な作業員の人々の姿は強烈な印象として残った。翌春、松前への転勤の話には迷うことなく応諾したのである。

松前に赴任して、待ち受けていたのが郷土資料館の展示構想の策定、展示資料の収集、国道の改良工事に伴う緊急発掘調査の準備であった。郷土資料館は、新たに建設した松前町民総合センター内に設置する計画だった。50年度の開館予定であり、榎森進氏(松前町史編集室長)を中心に町の有識者をもって展示シナリ

\* 松前町文化財保護審議会 委員

才が纏められ、50年秋には何とかオープンに漕ぎ着けることができた。

49年度の発掘調査は、当初建石遺跡と小浜遺跡の2カ所の予定で、高野遺跡の調査に参加された先生方や学生時代の友人たちに応援を仰ぎ、夏休み期間中にメドを付ける計画であった。ところが急遽もう1カ所、大尽内遺跡の調査を優先せざるを得なくなり、調査の予定が大幅に変更となってしまった。小浜遺跡の調査では、携わる者が私一人となり、経験不足の身としては心細く不安な調査であったことが今でも思い出される。

郷土資料館の開館を終え、松前町では今後大規模な調査が予想されることから、51年1月中旬から3月初めまで、奈文研の「遺物整理課程」の長期研修に参加する機会を得た。北海道からは釧路市博物館の西氏と二人で、全国から20人程の参加があり、多彩な講師陣による旧石器時代から中・近世期に至るまでの講義と実習・見学、そして参加者たちとの語らい、その後の交遊は今でも続き、大きな財産になったと思う。

この頃から北海道でも埋蔵文化財に対する認識・危機感が深まり、いわゆる行政発掘件数が大幅に増加するに及んで、渡島・檜山管内にも担当職員を配置する自治体が増えてきた。しかし、それでも足らず、55年から始まった白坂遺跡群の調査まで、他町村の応援や担当する機会が何度もあった。遺跡毎に当然のことながら性格や条件が異なる訳だし、各調査員の技術を学ばせてもらうのには大いに参考とさせていただいた。

各地に発掘の仲間が増え、始まりは親睦と慰労を兼ねて、調査が一段落した頃、函館に集まって酒でも飲もうかということだったが、何か物足りなさをおぼえた。スライドでも持ち寄って、調査の状況と成果を発表しあい、お互いに情報を共有しようということになった。ここで発足したのが「南北海道考古学情報交換会」である。会の運営は堅苦しくなることは極力避け、開催地は各町村持ち回りとし、大勢の地元の人々の参加を期待したものであった。会の運営には当初から石本・藤田の両氏が携わり、その尽力には誠に感謝に耐えないものである。当会が若い人たちに引き継がれ、今日に至っていることは何よりのことと思う。

昭和49年以来、数々の調査に携わってきたが、振り返ってみると、未熟さと不勉強故の自責の念に耐えないことばかりである。松前町に限って、特に印象に残っているもの、今後の課題になりそうなことを記したい。

### イセバタケ貝塚と盛土遺構

イセバタケ貝塚については『松前町史』で記述したが、若干補足しておこう。地名の由来について調査の指導にあたった河野広道博士は「イセバタケという名称そのものが北海道的ではないが、イセは“伊勢のへいしはすがめなり”の伊勢で、素焼の瓶の別名である。江戸時代に道南地方の庶民が使用していた素焼きの容器がそう呼ばれていたのである。ハタケは畠で、イセバタケは“素焼きの瓶の畠”的意味」と解説している<sup>(1)</sup>。

調査の概略は町史の通りであるが、父の河野常吉氏が「根部田村伊勢畠砦址」として紹介している<sup>(2)</sup>。根部田村とは、字館浜の旧地名である。史蹟名に砦址とあるように、当時は「往古の蝦夷の穴居した砦址」と考えていたようであり、略図も示している。それによれば東西約20間、南北約49間の略長方形、底部は半円に凹み、深さは18尺、長さ30間であり、前方に土壘を設けてあったとある。由来・伝説として「往々石鎚、土器類を発掘し、又は金塊等を掘出したるあり、往古蝦夷の穴居したる砦址なり」とある。

赴任以来、春まだ耕作の始まる前、町内各地の遺跡の分布を調べ始めたが、この頃は今のように畠が放置されていることもなく、低・中位の段丘はほぼ畠として耕されていた。館浜小学校裏手から湯ノ川に沿って共同墓地を越え、中位段丘の斜面一帯に夥しい量の遺物が散布しており、永田富智（のち文化財課長）が「道南最大の遺跡」と記述していたのも頷けるものだった。発掘したとみられるあたりは、周辺とは異なり広く凹んだような地形だったと記憶している。

偶然居合わせた地元の人に「ずいぶん土器が落ちてますね」と声を掛けると「昔、畠仕事をしていた時に金がでてきたんだ。それを函館から来た行商の人に頼んで現金に替えてもらったら結構な額になったんで、それを聞いた近所の人たちが我先にあたりを掘り返し、

それでこんな風になったんだ」と。河野常吉氏も、調査時にこんな話を聞いていたのではあるまいか。少し想像を加えると、10年程前に知人が知内川で16ヶほどの砂金を採集したことがある。ちょうどフィルムケースに入る大きさで、今でもこんな大きなものがあるのかと感激したものである。近世初期には、知内川の他、町内の鴨津川、小鴨津川でも盛んに採掘された歴史があり、これらの川に石器の素材を求め、偶然拾った砂金をイセバクケに持ち込んだのかもしれない。

さて、河野氏の報告では「砦址」として松前町内でもう1カ所紹介している。「船窓砦址」がそれであり現在の静浦B遺跡とみられ、やはり広範囲に遺物が散布している。報告によれば南北約30間、東西約63間の長方形をなし、底部は半円の形状で、その深さは18尺で前方には土壘をめぐらしてあるという。

さて、この「砦址」をどのように解釈するか、近年の考古学の成果を踏まえるならば、縄文時代の「盛土遺構」と理解すべきであろう。三内丸山遺跡ばかりでなく、道内でも函館市・北斗市・福島町でも知られており、松前町では東山遺跡がこれに相当するだろう。

東山遺跡は及部川右岸の低位から高位の段丘上に立地し、細石刃から近世・明治初期に至る遺構・遺物が見られ、松前町内では最も広大な面積と豊富な内容を持っている。「盛土遺構」に係る調査地点は、高位段丘の東縁にあたる部分で、急傾斜地の治山工事による事前調査であったため少面積であったが、遺物包含層が2尺以上に及び、円筒土器下層式から上層式の各期にわたる膨大な量の遺物が出土している。松前町の場合の一般的な包含層と比べ、異常としか言いようが無く人為的な要素を考え「盛土遺構」と解釈したのである。調査地点の背後（西側）は杉林と藪になっているが、大きく凹んでいる様子が見て取れる。

「盛土遺構」の可能性のある3遺跡を紹介した。一部だけ調査はされているものの、遺跡全体からみれば極々わずかで、何時の日か全貌が明らかになることを期待しておきたい。

## 大沢遺跡とキリストバチ

盛土遺構の可能性を含みつつ、中世から近世の要素

を合わせ持ちそうな例として大沢遺跡を紹介しよう。大沢遺跡は字大沢、大沢川の右岸に沿って舌状に張り出した中位の段丘上に位置している。大沢神社脇の小径を登り、2~300尺ほどの地域である。

昭和61・62年に、当時松前町史編集室長であった永田富智氏の発案で、この地域が大沢キリストバチの処刑地の可能性があるのではという想定のもと、「松前町史に親しむ会」が函館カトリック教会などの協力を得て、発掘調査を行なったものである。キリストバチの処刑とは、寛永16(1639)年、砂金掘り人夫に紛れていたキリストバチ信徒のうち50人を千軒岳で、50人を大沢で、6人を石崎(上ノ国)で刎首したとの記録がある。いずれの場所も諸説あり不明となっている。

永田氏の聴き取り調査の結果では、大沢の名主だった佐々木家の伝承の中に、同家所有の畠の中に古井戸があり、刎首した信徒の首をその水で洗い、遺体はその近所に埋めたというものであった。調査の概要は報告書に記した通りだが、発見されたのは古井戸と縄文時代の炉跡だけであった。井戸は笏谷石の切石を組合せた立派なもので、松前でのこの石の流通経緯を考えても江戸中期以降であり、処刑年代とは合致しないと判断し処刑地は不明のままである。

この調査期間中、何度か周辺を歩く機会があったが現在とは違い、このころは、ほとんどが耕作地で周辺の状況も把握しやすかった。調査地点から台地の奥へ100尺ほど行ったあたりが大沢遺跡の本体部と目され、そのあたりは地元の人々によって通称「寺屋敷」と呼ばれている。正確な範囲は不明だが、目測で約北東から南西に100尺弱、西北から東南にかけて50尺ほどが大きく皿状に凹んでいる。この凹んだ範囲全体は、縄文時代中期後半あたりを主体とする包蔵地のようである。数年前、再び現地を訪れる機会があったが、耕作放棄地となり、杉が植栽されていたが遺物はまだ拾え、一段高い東側の平坦面からは特に多く、イセバクケや東山遺跡と同様の盛土遺構を伴う遺跡ではないかと推察されるのである。

さて、福山城の背後寺町の一角、法源寺の東隣に曹洞宗寿養寺があった。同寺は明治元年の兵火によって焼失し、再建されるも、同43年に留萌管内天塩町に移

転し現在に至っている。現在では同寺の墓地のみが残っている。「御巡檢使応答申合書<sup>(3)</sup>」では「福形山寿養寺、本寺羽州秋田五丁目村ノ円通寺、永正十四年草創」とあり、別の史料には寿養寺「福形山寿養寺、本寺同法幢寺。永正十四年丁丑建立。旧記曰、永正十四年從大沢移福寿(形)山寿養寺于大館云々<sup>(4)</sup>」である。地名と史料から、大館に移る前の寿養寺がこの地にあった可能性も否定できない。

さらにもう一つ、本遺跡の北東側に小さな沢があるが、これを越えた緩斜面の地域が「キリシタバチ」と呼ばれている。地名の由来は分からぬが、「バチ」は「畠」の意味かもしれない。「キリシタ」とは、何とも思わせぶりな名である。かつては杉林のため、全体の様子が把握できなかったが、近年、高圧線敷設工事によって杉が伐採されたので、遠くからでもその場所がすぐ分かるようになっている。

昭和42年、田中淳氏（当時松前町職員、のち森町職員）、千代肇氏（当時遺愛高校教諭）や函館エゾ切支丹研究会の人々が、大沢川一帯でエゾキリシタン殉教の地を明らかにすべく調査をしており、その概要が道家庸熙氏によって纏められている。キリシタバチの部分について引用すると「小川と小川との間にはさまれた緩傾斜地の中央部に土堤で囲まれた略正方形に近い平坦地が認められた。南側土堤の中央部には2尺の切れ目があり、東北隅にも1尺程の切れ目があって入口と出口を思わせた。土堤内部には杉が植栽され、発掘調査は困難視されたが、木立の間隔をぬって東南側土堤と入口と思われる付近の2カ所でトレンチ調査を行なった。東側土堤の近くでは、深さ60cmにわたって土層が搅乱されており、入口付近のトレンチ（長さ3.6尺、幅30cm、深さ60cm）では、深さ20cm位の箇所から川砂・炭化物、鉛色の焼石1個が発見される…<sup>(5)</sup>」と。土堤の規模は23×23尺で、ほぼ方形をなしている。土堤の高さ（現状で1尺強）と内部の広さから、何らかの建物の存在を考えている。

土堤の在り方から見て、明らかに歴史時代の所産であろうが、建物があったのか、あるいは馬を囲っておいた施設とも考えられる。なお、前述の「寺屋敷」エリアに凹みの中央西側に鉤形の石積みが、「寺屋敷」の

入り口と思しき付近に、どう考えても大沢川から曳き上げたのではとみられる思わせぶりの大石がある。大沢川とその支流寺ノ沢川一帯には、砂金採掘の跡が良好に残っており、知内川流域とともに、藩政時代の産業遺産として十分な価値を有していると思う。盛土遺構の可能性のある大沢遺跡とともに、保存と将来の活用に留意してほしいものである。

### 光善寺地下道様遺構

昭和54年7月、町民から光善寺裏の畠に通じる道に穴が空いているという通報があった。この道は光善寺墓地内を縦断して、坊主沢に沿って六車宅裏手に行き、幅1間程度で、最近では畠に行く人以外は利用しない道である。だが、藩政時代には寺町から新荒町へとつながる道であった。現地に向かうと確かに道が陥没しており、古くからの道であるから井戸跡とも思えず、意外に深そうで、しかも、ある程度の広がりもありそうだった。

調査は、この年の10月から始めることとし、穴を垂直に下げるのではなく、坊主沢側から横に掘り進めることとした。その結果、この穴は垂直のもの（井戸様）ではなく、岩盤を掘りぬいた横穴らしく、道路の穴は、天盤が崩落したものと判断された。土砂を取り除き、腹這いになれば何とか中に入れそうになったころ、作業の進行を取材していた記者が、締切時間も迫っていることから中に入りたいと言い出したのである。今から考えれば随分乱暴な話しである。見守っていた永田氏（文化財課長）は、私の腰に100尺の巻尺を括り付け、酸欠状態だったら困るからとローソクを持たせ、記者とともに中に入らせたのである。

入ってみると、岩盤の崩落が顕著なのは始めの箇所だけであり、5尺ほど進むと安定し、緑色凝灰岩の岩盤を割り貫いて（高さ180～200cm、最も高い部分で2.2尺、幅0.8尺程度）おり、天井部分がやや丸みを帯びた長方形の断面を呈していた。奥に向かって左側には半ば埋もれていたものの、幅約0.3尺、深さ3cm程の浅い溝が続いていた。壁面にはタガネの痕が見られ、丁寧なつくりであることが分かった。穴は緩やかに傾斜しており、50尺過ぎあたりから、ローム層を割り

貫いており、約 63 ㍍進んだ地点で崩落していた。測量は役場の西村技師にお願いし本文に示した図は、丸山恵照氏の「松前光善寺古廃庭復原」<sup>(6)</sup>に示された図を参考までに転載したものである（図 1）。

この地下道様遺構は、どうやら浄土宗光善寺の庭園あたりから、坊主沢に向かって続いているらしく、これが何の目的で造られたのか、マスコミを大いに賑わしたのである。曰く

- ◇お城の抜け穴ではないだろうか
- ◇お城の堀に水を入れる用水路ではないか
- ◇埋蔵金を埋めるために造ったのではないか
- ◇例えばキリスト教などが秘密の礼拝場所などに使ったのではないか

等など珍説奇説が飛び交ったのである。

54 年度の調査はここまでとし、次年度は崩落箇所の確認とその延長がどこまでか、さらに坊主沢との関係はどうなのか、この遺構の目的は何かを明らかにすることとし、白坂遺跡の調査も控えていたことから 4 月下旬から開始することとした。

その結果、仮の入口とした部分から坊主沢までは幅 1 ㍍ほどの溝が続いている、その内側から 5 カ所、柱穴らしきものが確認された。つまり、溝の上部には何らかの覆屋があり遺構の入（出）口を保護していたと考えられた。溝の始まりは、坊主沢の川床より現状では、約 1 ㍍近く高いことが分かった。

庭園の背後には叶稻荷の小さな祠があるが、その背後がやや凹んだ地形となっていた。遺構の測量結果と現況とを照合すると、陥没地点はこのあたりの可能性が高いと考えられたので深いトレーナーを入れることとした。結果、ついに崩落地点に達することができ、崩落の痕跡を追うと、庭園の滝組みの背後に続いているらしいことが分かった。どうやら遺構と庭園とは、何か関係がありそうだと予想されたのである。

ちょうどこの頃、松前高等学校長丸山恵照氏は同寺副住職松浦拓雄氏とともに、庭園の復原に取り組んでいた。特に築山や滝組みの復原に力を注いでおり、作庭時に近い状態を取り戻すべく努力されていたのである。発掘をこれ以上進めると、滝組みそのものに大きな影響を与える心配もあり、ここで休止とし、遺構

の目的解明はお預けとしたのである。

さて光善寺だが、開基年代には二説あるようだ。一つは『寺社明細帳』<sup>(7)</sup>（大正 9 年）によれば「京都大本山智恩寺末 浄土宗 高徳山千島教院光善寺 天文二年草創 開山了縁和尚」とあり、『御巡檢使応答申合書』では「本寺京都百万遍智恩寺 天正三歳草創」とあり、『福山秘府』年歴之部でも同年の記述となっている。草創当初から現在地にあったのではなく、かつては大館（徳山館）にあり、『松前家記』その他にあるように、福山館完成後の元和 5（1619）年ころ、他の寺院とともに現在地へ移転したとみられている。

何度か火災に見舞われているようだが、最近では文化 5（1808）年と天保 9（1838）年、明治 36 年の 3 度あり、明治 36 年では「二王門 山門 経蔵等ヲ残スノ外堂宇ハ悉ク鳥有ニ帰ス」状態だったようだ。文化 5 年の火災の後、同 7 年 10 月に再建されている。8 年から 9 年にかけて松前に幽閉されていたゴロウニンの『日本幽囚記』<sup>(8)</sup>の中に興味深い記述がある。文化 9 年 3 月中頃から（松前奉行所より）ようやく街中とその周辺の散歩の許可が下りたようだが、露曆 4 月 23 日和曆（3 月 23 日）「火事で焼けて最近建立された墓地近くの寺社へ行く」「やがて通るべき小径を検分した」とある。ゴロウニンらは、その翌日早朝脱走したものの、翌月 4 日、木ノ子村（上ノ国町）で再び捕らえられている。ゴロウニンの見た寺院は光善寺であり、「小径」とは地下道様遺構の上の道だったかもしれない。

丸山氏の研究によれば、明治 22 年頃同寺の檀頭であった富永氏の諸記録の中に「（忍海上人は）天保十二年辛丑年三月十四日光善寺二十四世ヲ襲ク 是ヨリ以後日夜再建事業ニ心力ヲ盡シテ本殿建立ノ功ヲ告ケ、尋テ庫裏樓内宝庫其他数個ノ建物ヲ新築シ、亦タ御靈屋ヲ新築シテ之レカ費用ヲ献上ス 藩主恩賜ヲ賜ヘリ数百ノ大石ト樹木ヲ集メ、奥殿ノ庭園ヲ築キ藩主御仏參之際殊ニ賞シ、御手許ヨリ数品ノ賞与アリ 其他門前之石垣ヲ始メ境内之敷石ニ至ルマテ一トシテ盡サザル処ナク大ニ境内之面目ヲ一洗セリ…」<sup>(9)</sup>とあって、庭園の作庭年代は天保 12 年以降と考えている。

現在のところ、庭園と地下道様遺構との積極的な関係を結ぶものはないが、滝組みに向かっていることを

考慮すると、遺構と滝組みは同時期、しかもそれへの導水路としてであり、遺構のレベルと滝口のレベルの差から、サイフォンの原理を用いた可能性も否定できない。将来、庭園の本格的な整備復原があるとするならば、こうした経緯があったことを踏まえて頂ければと念じつつ記した次第である。

なお、ゴロウニンが幽閉されていた頃は、松前藩が奥州梁川へ移対されていた（文化4年から文政4年まで）時代である。

### 原口館と「原口社教」

最後に発掘調査と地域住民との関わりについて一つの例を紹介しておこう。標題の「原口社教」とは、正しくは「原口地区社会教育委員会」の略称であり、純然たる民間のグループである。

原口地区は渡島支庁管内の西端で、檜山支庁上ノ国町の小砂子地区に接する。現在でこそ道路が整備され松前の中心部から車で25分程度の距離だが、かつてはバスで片道2時間以上も要する不便な地域であり「陸の孤島」とも呼ばれていたのである。昭和29年に三村一町（大島・小島・大沢村と松前町）が合併して新しい松前町が発足し、原口地区は旧大島村の一部として松前町に組み入れられた。

しかし、地域格差は如何ともしがたく、安易に行政に依存するだけでなく、自助努力なしにまちづくりはできないということで、昭和31年1月に「原口社教」が発足したのである。学校を活動の拠点としたものの、PTA活動とは異なり、設立の目的は「地域住民の住みよい平和な町づくりと向上発展に務め会員相互の研修及び親睦を図ること」とし、原口地区に居住する住民有志に加え、原口小中学校の校長・教頭、診療所の医師・事務長、警察官らによって組織された。地域の活性化や町おこしなどを目的とした団体・グループや活動は全国各地で見られたが、少子高齢化や過疎化の進行に伴う地域の衰退によって活動が鈍くなったり、行政への陳情や圧力が主たる目的であれば、それが達成されると解散や自然消滅することが多い。だが、「原口社教」の場合では平成18年に創立50周年を迎えていたが、ここまで継続してきた理由は、様々あろうが、

何より地域の人々のまとまりと会員の絶え間ない尽力、そのつど新しい目標を設定してきたことによるものだろう。

平成に入ってからは、地域の歴史の掘り起こしと、新たな地域おこしの拠点づくりなどを目標とされたようだ。歴史の掘り起こしについては、会員である清水弘平氏が原口地区の地名や由来、伝承を様々な機会に紹介されたり、会員の校長先生方が歴史の文献などを調べられてきた。昭和63年、関尚彦氏が原口小校長として赴任され、氏の発案により平成元年「原口館を探る会」が発足したのである。地域住民の間では、館の存在は伝承として語り継がれてきていたが、次のような事実があったので紹介しておこう。

清水弘平氏の記すところでは「昭和17年5月、桧山石崎（上ノ国町）の鉱山より原口のマンガン鉱を探しに奈良さんという方がこられ、奥末沢の止めの沢の左方（上流に向かって）にサクラマンガン鉱を発見しまして、その土地に坑道を掘っている時に古銭が見つかり、その古銭は昔の塩かますに二つもありました。それを可香椎一郎さんの馬車で運んできました。そのとき、原口の方々は土の中からお金が出たということで大変な驚きようでした」<sup>10)</sup>と紹介されている。その後、古銭は発見者らによって運び去られたようだが、ごく一部は地元住民の手元に残ったらしく、後日、市立函館博物館に寄贈されたという。

この話は現在でも原口地区では語り継がれており、知っている人は多い。かつて松前地方では、道から払い下げを受け、自家消費用の薪は冬期間にグループで山に入り、決められた量だけ伐採したものであった。止めの沢とは、春先の増水時に流送した薪を集めた場所を指し、古銭の発見地は、旧国道の奥末川に架かっていた橋から約150㍍ほど上流で、昭和60年ころまで水田がつくられていたあたりだという。

さて、ここで思い浮かぶのが昭和43年に発見された志海苔古銭の出土例である。旧戸井町では文政4（1821）年、62貫余の古銭が掘り出されたという話もあるという。道南十二館と古銭との関係を窺わせる話もある。なお、奥末川に沿って、かつてはアイヌの人々が居住しており、そこへ「羽後秋田地方海辺ノ人

「関兵ト云フ者來リ奥末ニ住居シ、蝦夷ヲ撫シ之ヲ督シテ漁業勤メシトイフ」ことがあり、寛保元（1741）年大津浪被害を受け、僅かに助かった人々が現在の原口に住み始めたと伝えられている<sup>(11)</sup>。

原口館は『新羅之記録』などの史料にあるように岡部六郎左衛門尉季澄によって築かれたとされ、河野常吉によれば第一館址と第二館址があり、その場所は現在の神山（原口市街の北側の台地）だという<sup>(2)</sup>。こうした文献や伝承・古銭の発見等から、「原口社教」の会員が中心となって、原口館に再び光をあて、先人の遺徳を顕彰するとともに、併せて地域おこしを図ろうとして結成されたのが「原口館を探る会」だった。

発掘調査の経緯・結果は報告書に記したとおりであり、残念ながら中世の館跡ではなく、東北地方北部で発見されている古代の防禦性集落に類似する、擦文時代の遺構と判断したのである。当時、この種の遺構は道内では未確認だったが、その後、乙部町小茂内遺跡や上ノ国町ワシリチャシ跡遺跡でも確認され、渡島半島南部の擦文文化期を特色づける一つとして成果を上げてきたところである。だが、調査に寄せてきた地元の人々の期待は大きかったし、それだけに落胆も大きかった。原口館はどこに、どのような形だったのか、依然として謎のままでありその解明は将来への宿題として残されているのである。

だが、「会」のエネルギーはこれで挫けることはなかった。円空や菅江真澄も歩いた難所といわれた藩政時代の「小砂子山道」の再発見活動、魚付け保安林の育成活動、旧原口小の解体古材を再活用して、原口地区が一望できる掛越山の頂上に集会施設「カダヘル 21」の建設、北海道開発局や北海道もりづくりセンターを巻き込んだ「桜松街道」の整備活動へと深化していくのである。なかでも「桜松街道」の整備は国道 228 号線の両側に松前町の象徴である桜と松を、渡島の西側玄関である原口地区に植栽し、通行する人々を歓迎しようとするものだった。平成 9 年から始まり、30 年近くなった現在では木々が立派に成長し、道行く人々の目を楽しませている。

「原口館を探る会」や「桜松街道」の整備に携わった「原口社教」の主要メンバーの方々はほとんど鬼籍

に入られてしまったが、地域おこしの活動は旧原口小に設置された「交流の里づくり館」によって受け継がれている。

原口館の発掘調査は、地域住民の夢と願いによって始まり、普通の調査とは一味、二味異なる楽しいものだった。だが、当初の目的は達成できず、ある意味、空振りに終わった調査だったかもしれない。だが、結果として、別の新しいきっかけを生み出した一つの事例として紹介した次第である。

## 註

- (1) 河野広道 1958 『史跡とさくら』 松前町
- (2) 河野常吉 1974 『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』 復刻
- (3) 『御巡檢使応答申合書』 松前町史 史料編 第 1 卷
- (4) 『福山秘府』 寺院本末部 卷之十三
- (5) 道家庸熙 1971 『蝦夷地に於ける切支丹について』 私家版
- (6) 丸山恵照 1985 『松前光善寺の古廃庭復原その後（一）』 『北海道の文化』 53 号
- (7) 『寺社明細帳』 大正 9 年 松前町
- (8) 『日本幽囚記』 斎藤智之訳
- (9) 富永胤介「光善寺沿革略記ニ対スル愚案」未発表資料 光善寺
- (10) 2009 『半世紀の歩み 輻』 原口地区社会教育委員会
- (11) 1918 『函館支庁管内町村誌』

光善寺裏（古廃庭・地下道）地形図

S 200: 1

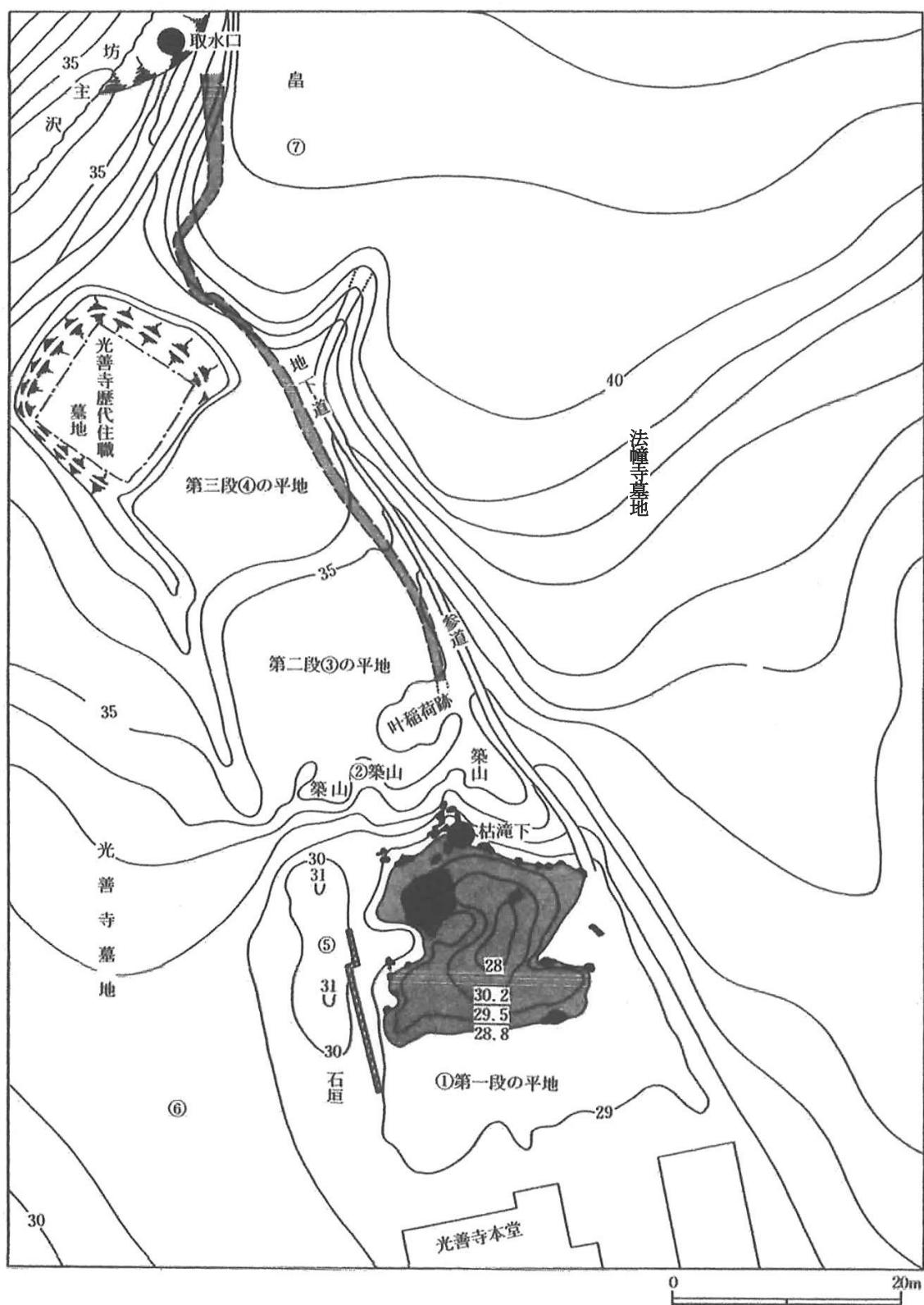


図1 光善寺裏（古廃庭・地下道）地形図

(丸山恵照 1985「松前光善寺の古廃庭復原その後（一）」『北海道の文化』53号 北海道文化財保護協会より転載)